

平成4年9月2日第3種郵便物認可
平成26年3月1日発行
(毎月1回1日発行)通巻第316号

日本の息吹

月刊
平成26年
NIPPON
NO
IBUKI

3

誇りある国づくりをめざすオピニオン誌

316

日本会議

- 安倍政権二年目を迎へて／小田村四郎
- 「義眼」を外して真実を見よう—『菊と刀』の呪縛を解く／高橋史朗
- 今、日本はいい国ですか？—特攻隊隊員からのメッセージ／奈美木映里



今、日本はいい国ですか？

—特攻隊隊員からのメッセージ

劇団アトリエッジ主宰・脚本家・演出家
奈美木 映里



なみき えり

国立大学国文学教授の父と純文学作家の長女として生まれる。大学時代より青年俳優座で演劇を学び、同時に糸居五郎氏の門下生のフリーのラジオDJとして、全国AM曲で活躍。NHK銀河テレビ小説「新宿物語」、漫画「3D-BOYS」のモデルとなる。ラジオDJを引退後、芸能事務所(株)サンディの代表として会社経営をする傍ら、ペンネーム「草部文子(くさかべ ふみこ)」としてラジオドラマや舞台の脚本・プロデュースを手がける。祖父は関東軍特殊情報部の大久保俊次郎大佐(陸士24期)、大叔父は横須賀鎮守府司令長官の戸塚道太郎中将(海兵38期)、叔父は重巡洋艦羽黒航海長の太田一道中佐(海兵59期/羽黒にて戦死)

「日本に生まれてよかった」—観劇した学校の高校生達から届く山のようなお便り。劇場の観客の8割が若い女性たち。特攻隊や玉砕した兵士たちの物語を、現代の若者たちはどう受け止めるのだろうか。ラジオDJから飛び出した異色の演劇集団が伝えたいものとは—

▽知覧での目覚め

—特攻隊の物語の公演をなさって何年ですか。
奈美木 今年で16年目になります。ずっと草の根でやってきましたが、応援してくださるある先生が、「そろそろ世に出なさい」と言ってくださって。いま日本人が原点に戻ることができるかもしれない大事な時期だからと。

—もともとはラジオ業界で活躍なさっていた。
奈美木 ラジオのDJを長くやっていました。ローリング・ストーンズが大好きで世界中のコンサートを追っかけたりして、彼等の曲を多くのリスナーに聴いてほしくてラジオ業界に入ったというわけです(笑)。実家は真言宗なのに、ミュージカル映画のジーザス・クライスト・スーパースターのイ

エ

のが、FM鹿児島放送部長だった東正知さんでした。これが不思議なめぐり合わせだったのです。

—といいますと？

奈美木 東さんからは「お前」じゃなくて「貴様」というんだとかいろいろと教えてもらいましたが、「お詳しいですね」と言ったら「歳の離れた兄が海軍で死んでいます」と。そこで私が「私の叔父も海軍で、重巡洋艦『羽黒』の航海長として艦橋(ブリッジ)で戦死しています」というと、東さん

ス・キリストが格好良くてクリスマス・キリストになったというくらい欧米を崇拜していました。一方、日本は大嫌いでした。私にとってそれまでの日本のイメージは他国を侵略して悪いことばかりしている格好悪い国だった。「祖国の為」というような言葉は私の中では死語だったのです。

ラジオの仕事で鹿児島に行ったとき、一日休みがあったので、武家屋敷を見ようと知覧を訪ねたんです(*1)。当時は、陸軍の特攻隊基地があったなんて全然知りませんでした。たまたま案内板に引かれて特攻平和記念館に入ったところ、ガンと頭を殴られたような衝撃を受けました。あの若者たちの遺影の笑顔のなんと純真さ。美しい文字で綴られた遺書の誠実さ、けなげさ。それを目にしたと

き、堰を切ったようにとめどなく涙が溢れました。今の自分があるのは、彼らが国と家族を守ろうと散華してくださったお蔭なんだ。初めて自分が日本人であったということに魂レベルで気づかされた。そして歴史の真実に目覚めていったのです。

— そうだったのですか。
奈美木 いわば映画のマトリックス状態ですよ(*2)。これまで自分が信じてきたものは何だったのだらう。それまでマスコミが一番偉いと思っただけで風切っていた自分がたまたまなく恥ずかしくなりました。そこから罪滅ぼしが始まったのです。

▽時空を超えて

— それで舞台を。

奈美木 最初はラジオ劇だったんです。まだ目覚めていないかつての私のような若者たちに歴史の真実を伝えたいと思って、書き下ろしたのがラジオドラマ「飛行機雲」。これが元になって、舞台劇「飛行機雲」が生まれました。「飛行機雲」の脚本の監修をお願いした



演劇集団アトリエッジの後援会名誉会長に中條高德氏(「英霊にこたえる会」会長)、後援会会長に行徳哲男氏(日本BE研究所所長)、後援会理事長に藤田幸生氏(公益財団法人 水交会理事長、第24代海上幕僚長)が就任されている。

写真は中條会長[前列左]をお囲みして。後列左から、俳優の湯川尚樹さん、山口剛慶さん、奈美木さん、座長の市川博樹さん(撮影:平成26年1月末)

(*1)知覧:江戸時代の武家屋敷が保存され、「薩摩の小京都」と呼ばれている知覧町は合併により現在は南九州市の一部となっている。知覧陸軍飛行場(大刀洗陸軍飛行学校知覧分教所)は、大東亜戦争末期、本土最南端の陸軍の特攻隊基地となった。戦後、特攻隊の母、鳥濱トメさんなどによって隊員たちの物語が伝えられている。なお、知覧特攻平和会館の1,036名の遺影を全国行脚し収集された、元特攻隊隊員の板津忠正氏のインタビューが本誌平成14年8月号に掲載されている。

(*2)映画「マトリックス」:1999年、アメリカ映画。現代社会が実はコンピュータの作り出した仮想現実だったとの設定で、大ヒットした。



■「流れる雲よ」

鹿児島の特攻基地。若き特攻隊員たちのもとにラジオから奇妙な放送が流れる。それは未来からの電波だった。日本が敗戦することを知ってしまった特攻隊員たちは果たして…。第38回ギャラクシー賞奨励賞受賞。

■「ぞめきの消えた夏～グアム玉砕戦乱舞闘」

「ぞめき」に包まれる現代の徳島とグアム島守備隊の闘いとが交錯する魂の物語。民放連賞受賞。「ぞめき」とは阿波踊りのお囃子。グアム島守備隊には徳島県出身者も多く参加。

■公演情報

「流れる雲よ」

【東京】中野ザ・ポケット、5月28日～6月8日

【知覧】3月26日、南九州市コミュニティセンター知覧文化会館、14時(1回のみ)

公演のお問い合わせは、

アトリエッジホームページ <http://www.djdc.jp/at/> から

【写真は「流れる雲よ」のワンシーン】

学校公演、貸切公演、
慰問公演、奉納公演
を行っています。
ご相談ください。

ださったりして、ありがたいことです。

— 生徒たちの反響は？
奈美木 観る前と後では生徒さんたちの顔つきが変わります。女の子はそれこそ腰が抜けるくらい泣いちゃったり…。エンターテイメントの影響力の大きさを改めて思いますね。「今度、靖國神社に行ってください」とか、劇場にも靖國神社に参拝してから来るようになるとか、目に見えて態度が変わっていくんですね。

実はこのことは役者さんにも言えます。若い俳優たちが稽古を積むことでみるみるうちに変わっていきます。稽古では先輩後輩の会話の仕方や所作、そして行儀作法まで徹底して鍛えられます。言葉遣いが悪かったり、靴をそろえていなかったりすると、罰金です(笑)。溜まったお金は福島の子供たちに寄付しています。

そんなことが噂になって、最近では、大手の芸能事務所が若い俳優さんをうちに預けていくというようなこともありませう。「鍛えてくれ」というわけです。

はハッとされて持っていた本を落とされました。なんと、東さんのお兄さんも羽黒のブリッジで戦死されていたのです。二人と一緒に写っている写真を見たとき、私は言葉を失いました。そして、思いました、これは天からの命令だと。

— 導かれた。
奈美木 これが自分の使命だったんだと思いましたね。

— とはいえ、障害も大きかったのでは？
奈美木 周りからは「特攻隊？奈美木さん、頭おかしくなったの？」とか「靖國神社？そばにこないで」とかいわれて散々でしたね。特攻隊の話なんかとても流せないほどのラジオ局からも断られました。でも、どうしてもあきらめきれなくて、FM放送局の各社長宛にダイレクトに依頼の手紙を出しました。「とにかく聞いてもらえればわかる」とCD、MD、カセットテープを同封しました。すると36局中28局から「流しましょう」とお返事を頂いたのです。社長クラスは結構わかってくださるんだと思います。放送は好評で、その年のギャラクシー賞(*3)の奨励賞

賞をいただきました。

— 「流れる雲よ」も、また同じく先の大戦を扱った「ぞめきの消えた夏」も、現在と過去が交錯するという設定が物語に引き込まれる絶妙な仕掛けとなっていると感じました。

奈美木 ラジオドラマを作るときに、「今、自分達がやっているラジオの放送を特攻隊員達が聞いたら何と思うだろう？」という発想が湧いたんですね。それで特攻隊出撃に備えている隊員達が未来のラジオ放送を受信して、現代のラジオDJと交信するという設定が生まれました。

▽若者がターゲット

— ラジオドラマの反響を受けて舞台を？
奈美木 ええ。これも最初のうちはいろいろとありました。靖國神社で奉納公演(平成18年)させていただいたときは、マスコミ関係の人達は潮が引くように私から離れていきました。逆に保守系の人達から怒られることもありまして。階級章が間違っていると、服装

が違うとか。

ただ、ここが肝心のところなんです。私たちのモットーは若者にきっかけを与えるということなんです。若い人達をターゲットにしてやっているんです。自分で気づいて靖國神社や知覧に行く人はそれでいいんです。私たちがターゲットにしているのは、日本がアメリカやイギリスと戦争したということすら知らない若者たちなのです。「第二次世界大戦で日本はどこで戦ったか知っていますか」との問いに「北朝鮮とやって日本が勝ったんだよね」などという若者がいるんですよ。そんな若者たちに関心をもってもらうきっかけを与えたいのです。

ですから、なるべく若者に近い感覚を意識してやっています。例えば、特攻隊員の役者たちが長髪、茶髪で、日の丸をあしらったTシャツ姿でダンスを踊ったりするわけですから、史実とは程遠いわけです。最初は英霊の方々に失礼すぎるかな、と躊躇したこともあったのですが、きつと英霊の皆さんは私たちの志を理解して許してくださると信じてやっています。実

際、お客さんの8割は若い女性たちで、皆、涙流して感動してくださいます。ときには、報道のカメラなども入ったりするんですが、カメラマンたちも泣きながら撮影しているんですね。伝わっているなあと。観劇の後、初めて靖國神社にお参りしてきました、などというお便りを若い世代からいただいたりすると、本当に嬉しいですね。

だから私は「おかげ横丁の招き猫だ」といっているんです(笑)。きっかけは何でもいい。そこまで来れば、あとは自分から神宮の鳥居をくぐっていく人も出てくるだろうと。

— 学校でも公演なさっているのか。
奈美木 はい、公立はまだですが、私立の中高一貫校などが呼んでくださったり、劇場を貸し切ってく

(*3)ギャラクシー賞：放送批評懇談会が昭和38年に創設。テレビ、ラジオ、CM、報道活動の4部門で優秀作品を表彰している。奈美木氏のDJシアター「飛行機雲」(エフエム鹿児島/サンデー)は、第38回で奨励賞受賞。



「ぞめきの消えた夏」のワンシーン。阿波踊りと兵士、そして英霊たちが交錯する

▽「今、日本はいい国ですか？」

「役作りを通して、実際に人間が成長していつているわけですね。ところで学校の場合、教師の反応は？」

奈美木 教師の皆さんもとても感動してくださって、実際、生徒に書かせた山のような感想文が送られてきます。

「感想文はどのような内容が多いのですか。」

奈美木 これは劇場でのアンケートでも同様なのですが、演劇が素晴らしいというよりも、「初めて自分の国のことについて考えました」「日本に感謝したい」「日本に生まれてよかった」などという感想が多いですね。自分達と年端の変わらぬ若者たちが、国のために、家族のために、後世のために、つまり現在の自分達のために死んでいったという事実に感動するのでしょう。利他の精神という日本人のDNA、遺伝子が呼び覚まされるのかもしれない。

と特攻隊員が未来に向かって問いかける場面があります。未来(つまり現代)のDJが「質問ありますか」と聞くと、特攻隊員が「今、日本はいい国ですか？」と客席に向かう姿勢で語りかける。すると、観客の皆さんは自分に聞かれているように思われるわけですね。それで、アンケートに、「いい国といわれるように頑張りたい」と書いてくださいます。

「歴史からの問いかけが現代の我々にぶつけられるわけですね。奈美木 答えは人それぞれだと思いますが、過去から現代を、あるいは未来を見るとき縦軸を入れることで、今を生きているということの意味がより深く問われていくのではないかと思います。」

もちろん若者だけでなく、大人の方々にも応援いただいていることも心強いです。

ある国の大使の方が日本に一時帰国して靖國神社に参拝された帰りに、街角の私たちの公演のポスターを見て、突然観に来られたことがありました。とても感動してくださって、「僕たちは皆さんと同じ思いで仕事をしています」と

おっしゃいました。とてもうれしかったですね。その方は後日、今度は娘さんを連れて二度目の観劇をされて、任地に飛び立っていかれました。

「知覧から飛び立たれた穴澤利夫少尉の許婚だった伊達智恵子さんも観劇なさっていますね。」

奈美木 はい、10年ほど前、来てくださった。以来、毎年のように観に来てくださいました。昨年他界なさって、そのときは「追悼公演」をやらせていただきました。そんなご縁もあって、英霊の方々には理解してくださっていると感じます。

この3月には、知覧で二回目の公演を行います。演劇の設定は海軍が舞台で、知覧の特攻隊基地は陸軍なのですが、九州の若手の経営者の人が昨年に引き続き企画してくださって、私にとっても人生の大転換の地であり、正に聖地である知覧での公演は夢だったので、緊張しますが、とても楽しみです。

▽英霊と阿波踊り

「もうひとつ戦争を題材にした

んでくる。それを見ていたら、ふと、この中に御霊が混じっているんじゃないか?と思ったのです。笠を目深にかぶっていると顔が分からない。グアムで戦死された徳島出身の英霊たちもきつと踊りたかっただろうな、彼らをこの踊りの中に返してあげたいと思いました。そのことを物語に織り込んだのが『ぞめきの消えた夏』。舞台では、最後に兵隊たちが阿波踊りの踊り子たちの中になだれ込んでいきます。

「そういう経緯があったのですね。」

奈美木 実際、不思議なことがいっぱいあります。舞台袖から踊り子たちを「一、二、三、…」と数えて送り出すんですが、「あれ、今日は一人多かったな」とか(笑)。グアム島守備隊(*4)は95パーセントが戦死され、徳島出身の戦死者は723人。

数少ない生還者の一人で徳島市出身の重田督之さんにインタビューしたのは、脚本を書き上げた後でした。劇ではまるで重田さんモデルにしたような生き残りのおじいちゃんが出てきますが、私は



作品、「ぞめきの消えた夏」は、グアムで玉砕された徳島出身の兵士たちの物語ですね。阿波踊りは盆踊り、つまり慰霊の踊りだと改めて感じました。

奈美木 徳島の阿波踊りに行かれたことありますか? すごい人出で、私は、初めて行ったときびっくりしました。FM徳島とはご縁があって、普段の徳島の町の様子もよく知っていますが、阿波踊りの時期だけはまるで別世界です。どこから湧いてきたのかと思うくらい、次から次へと人々が踊りこ

重田さんにお会いしたとき、その偶然の一致に驚きました。また、「流れる雲よ」の主人公役を長くやってきた俳優がいるのですが、知覧特攻平和会館に展示されている遺影の中に、その役者さんに瓜二つの方がいて、本人共々びっくりしたこともあります。

私にはいわゆる霊能力などまったくないのですが、身辺でそういう不思議なことがよく起こるんですね。

作家さんたちが意識がないまま書いているという話がよくあります。私でも書くと、自分で書いた記憶がないんです。後で、読み返して、「こんな台詞、私が書けるはずがない」というような感じなんです。作品を評価いただいて、

(*4)グアム島守備隊の戦い:昭和19年サイパン島玉砕から2週間後の7月21日、グアム島に米軍上陸。約5万5千名の米軍に対し、迎撃つ日本軍は2万8千名。8月11日の小畑軍司令官の自決により組織的戦闘は終わるも残存兵によるゲリラ戦は終戦後も続いた。日本軍の生還者は1300余名。

「テレビの脚本書いてくれ」というような依頼があったりするのですが、私の場合、頼まれて書けるものじゃないんです。降りてこないと書けないというような感じなので、そういう依頼はお断りしています。

▽死生観と歴史の真実

— 英霊とつながってらっしゃる。奈美木 声が聞こえたり、姿が見えたりということはないのですが、意識の上でつながっていないと書けないですね。

ただ、作品を通じて訴えたいことは、はっきりしているんです。それは二つあります。一つは、死生観です。日本人には死を超えて生きるという感覚がある。誰だって命が大切。でもそれ以上にその大切な命をどう使うか、ということのほうがより重要なのです。大切な命を捧げてもいい、つまり生命以上に大切なものがある。それは何か、ということ。これが訴え

大切な命をどう使うか、真実はどこにあるか、自分で考えることが大事。その契機になれば…

たいことの一つ。

二つ目は、真実はどこにあるか、ということなんです。特攻隊の方々が私に教えてくれたのは、それまで本当だと思っていたことが実は全部間違っていたということでした。テレビのキャスターや評論家が言っていることを鵜呑みにするのはなく、自分で考えることが大事に付けてほしい。自分が正しいと信じ込んできたことが実は真実ではないかもしれないと疑うことです。

「特攻隊のことを美化している」と始めの頃は随分と批判されました。でも、私は「美化したい」と思ったのです。だって美しいし、格好いい。たったひとつしかない命を祖国のために捧げたんですもの。その美しさに触れたときに、日本は世界で悪いことばかりしてきたと刷り込まれてきたことは全て間違いだったのではないかと目が覚めた。そして勉強を始めた。それを特攻隊の隊員たちが私に教え

▽芸能とはお神楽である

— 演劇界やマスコミにも第二第三の奈美木さんが次々と生まれるといいですね。

奈美木 そうなったらうれしいですね。演劇も原点回帰しなきゃ。先ほど靖國神社の奉納公演のことに少し触れましたが、あれが日本の演劇の基本だと思うんです。英霊に喜んでいただくために奉納する。つまり神様を喜ばせるのが日本の演劇、芸能の原点だと思います。



グアムにて英霊に祈りを捧げる

てくれたのです。こうして私は戦後の洗脳から解き放たれました。

— そういう価値観と、ものの方について考えてほしいということですね。

奈美木 それに早く気づいて、目覚めないと国が危ういですよ。

— 『永遠の0(ゼロ)』の大ヒットなど、漸く気づきつつあるのかなとも思います。

奈美木 そうそう、あの映画では私は最初から最後まで泣きっぱなしでした(笑)。冒頭の零戦が特攻していく場面からもうだめでしたね。周りの観客も皆泣いていました。

— 15年やり続けて、理解者も増えてきた。

奈美木 変わりましたねえ。とくに3・11以降は、劇場はいつも満席です。何かが目覚め始めていると感じています。

— 安倍総理も靖國神社に参拝されました。

奈美木 さぞ英霊は喜ばれたことでしょう。

— 舞台では、「靖國神社の神門をくぐって二番目の桜の木で会お

す。天岩戸隠れでアミノウズメノミコトが踊ったのがお神楽の始めといわれています。そう、お神楽なんです。芸能はすべて。

「ぞめきの消えた夏」では最後に現代の若者が英霊に対して「ありがとうございました」というシーンがありますが、あれは演技ではなく本当に心の底から言っているんです。私は、「会場にたくさんいらつしゃって英霊の方々に向かって言ってください」と演技練習のときから言っています。役者さんはその通りに心を込めて言っているから本当に泣くんですよ。あの「ありがとうございました」は魂の叫びなんです。

▽玉碎の島、グアム島

— そうだったんですね。あれには感動しました。実際にグアムに行かれたことは？

奈美木 グアムには観光で何回か行っていましたが、あるとき、海岸で出会った老夫婦が、「戦争中、友人がこの海でたくさん死んでいます。ですからここで海水浴は出来ません」と語られました。私は



ハッと胸を衝かれ自分の無知に赤面しました。

その後、グアムに行くたびに不思議なことが起こるようになりました。あるとき、私だけ具合が悪くなつてホテルで寝込んだことがありました。そのとき、7階のホテルのガラス窓に黒い蝶がいっぱいパタパタと群れ飛んでいたんです。この高さまで飛んでくるとはグアムの蝶は元気がいいなあと思つていたら、翌朝、海岸を歩いてみると、ここにも黒い蝶がいっぱい飛んでいました。その蝶の跡をついていくと、低い丘の向こうに塹壕が残っていました。ビーチのすぐそばで、引き潮にならないと入れない場所がありました。塹壕に入ると薬莖や銃剣の先など戦争の跡がそのまま残っていました。

「ここにはまだ人がいる！」と感じました。目には見えないけれども、人の気配がすぐくて、「ああ、この方たちはまだ戦っていらっしやる」と思ったのです。

そこで、劇団の声の大きい俳優を連れてきて、「戦争は終わりました。一緒に日本に帰りましょう」と叫んでもらったのです。でも何

の反応もありません。ところが、彼が「命令口調でいわないと分からない気がします」というんですね。そこで、彼は「皆さんの上官に代わつてお伝えいたします。戦争は終わった。日本に帰るぞ。命令だ」と改めて叫びました。すると、風が強い日だったので、

気のせいかな、一瞬、パタッと風が止んだのです。辺りがシーンと静まり返りました。もしかしたら通じたかもしれないと思つてホテルに戻りました。そして、その日撮ったデジカメの画像を見て驚きました。その丘の上で撮った30数枚の写真だけ真っ白になつて何も写っていないのです。デジカメなのに、どうやって光が入ったんだらうと不思議に思っていると、1枚だけ、真ん中に黒い蝶がぼんやりかすんで写っている写真がありました。その話を防衛省のある人に話したら、その人はごく普通に「人間は死ぬとプラズマになるといえますからねえ」と言いました。「わかったよ」というメッセージだったのかもしれない。

— すごい体験ですね。
奈美木 ええ。ただ、体調が悪く

なると困るので、その後、グアムに行くときは、前もって靖國神社にお参りにいって特別なお守りを頂いて、それを身に付けて行くようにしています。そして、「日本に帰りたいときはここ(お守り)に入ってください。靖國神社にお戻ししますから」と念じています。何人かはお連れしているような気がします。

実際、こんなことがありました。靖國神社のお守りを付けてグアムに行つて帰ってきた日の夜のことで、私は自宅へ帰り、一緒に行った俳優の一人は翌日の仕事のため静岡のホテルに泊まりました。すると夜中に甘いオーデオロンの匂いが漂ってきたのです。静岡に泊まった彼も同じ時刻に同じような匂いを嗅いで、「これは自分の化粧品ではない、誰か来た」と思ったそうです。きっと同じ人物で、戦争がなかったらちよつとおしゃれをするようなスマートな紳士だったのかもしれない。

— 安倍総理は硫黄島の遺骨収集のため滑走路をはがす決断をされました。
奈美木 やればできるんですよ。

自分たちの国のために戦つて散華された方たちを、放っておくような国に未来はありませんから。歴史を継承しない国にも未来はない。そうならないように、「日本っていい国」って胸を張って言えるようにしたいですね。

私たちの劇団「アトリエッジ」は、「PRAY(祈り)」と「PLAY(上演)」を基本テーマにしています。特攻隊隊員や前線の兵士たちが私たち後世に託した祈りとは何だったのか。日本BE研究所の行徳哲男先生が、「感動とは感じて、動くことだ」とよくおっしゃいます。ぜひ私たちの劇を観にいらしてください。そのことが日本人の何かを自覚めさせる一助になればこんなに嬉しいことはありません。— 益々のご活躍をお祈りいたします。本日はありがとうございました。

読者プレゼント

演劇「流れる雲よ」の公演チケットをペアで5組(10名様)にプレゼント。
【場所】東京「中野ザ・ポケット」
【日時】平成26年5月28日〜6月8日
応募方法は35頁をご覧ください。